プロレタリアートと民族戦争　　1-24-2と同一の文章

１１１　イネッサ・アルマンドへ

親愛な友よ！　「祖国擁護」については、私たちのあいだに意見の相違があるのかないのか、私にはわかりません。あなたは、『マルクス記念』論集のなかの私の論文*と、いまの私の言明とのあいだに矛盾を見つけていますが、そのどちらも正確に**引用していません**。この指摘に答えることは私にはできません。『マルクス記念』論集が手もとにありません。そこでなにを書いたかを一字一句おもいおこすことは、もちろん私にはできませんでした。当時言ったことといま言っていることとを**正確に**引用しなければ、あなたの**そういう**論証に答えることはできません。

一般的に言って、あなたはなんだかすこし一面的、形式主義的に論じているようにおもわれます。『共産党宣言』から**一つの句**（労働者は祖国をもたない）を引用して、それをまるで無条件に適用し、民族戦争を**否定するところまで**行こうとしています。

マルクス主義の全精神、その全体系は、おのおのの命題を、（α）歴史的にのみ、（β）他の諸命題と関連させてのみ、（γ）歴史の具体的経験と結びつけてのみ、考察することを要求しています。

祖国とは歴史的な概念です。民族的抑圧を打倒するためにたたかう時代、もっと正確に言えば**時機**における祖国と、民族運動がはるか過去のものとなった時機の祖国とは、別のものです。祖国と祖国擁護とについての命題を、「三つの型の国家」（自決についてのわれわれのテーゼの第六項**）にあらゆるばあいに一律に適用することは**でき**ません。

『**共産党宣言**』には労働者は祖国をもたない、と述べてあります。

これは正しいことです。だが、そこで述べているのは、これ**だけではありません**。そこにはまた、民族国家を形成するうえでのプロレタリアートの役割はいくぶん特殊なものであるとも、述べてあります。第一の命題（労働者は祖国をもたない）をとって、それと第二の命題（労働者は自身を民族的階級として構成するが、それはブルジョアジーとはちがった意味においてである）との関連を**わすれる**ならば、それは大きな誤りでしょう。

では、この関連はどういう点にあるのでしょうか？　私の考えでは、プロレタリアートは**民主主義**運動（ある時機の、ある具体的な情勢のもとでの）では、この運動を支持することを、（したがってまた、民族戦争で祖国を擁護することを）拒否できないという、まさにその点にあるのです。

マルクスとエンゲルスは、『**共産党宣言**』のなかで、労働者は祖国をもたない、と述べました。しかし、その同じマルクスが、たびたび**民族**戦争を**呼びかけて**います。すなわち、マルクスは 1848 年に、エンゲルスは 1859年にそうしています（エンゲルスの小冊子『ポーとライン』の末尾。そこではドイツ人の**民族的**感情がまっこうからあおりたてられており、ドイツ人に民族**戦争**を直接に呼びかけています)。エンゲルスは、1891年に、当時さしせまっていたフランス（ブーランジェ）＋アレクサンドル三世の対ドイツ戦争の脅威を考慮して、「祖国擁護」を**率直に**みとめました***。

マルクスとエンゲルスは、きょう言うことと、あす言うこととがちがうわからず屋であったでしょうか？　そうではありません。私の考えでは、民族戦争における「祖国擁護」

をみとめることは、マルクス主義に**完全に**一致しています。1891 年にはドイツの**社会民主主義者**は、実際にプーランジェ＋アレクサンドル三世との戦争で祖国を擁護**すべきでした**。これは**民族**戦争の独得な変種となったでしょう。

注）　＊『マルクス主義と修正主義』（第15巻P14～23）　＊＊ 23 － 3（第 22 巻 P174~175）
　　＊＊＊『ドイツにおける社会主義』

第 35 巻『111 イネッサ・アルマンドへ』P262～263
1916 年 11 月 30 日に執筆

※「17-3 民族自決からみた三つの国家型」も参照して下さい。

ポイント

祖国とは歴史的な概念である。民族的抑圧を打倒するためにたたかう時代、もっと正確に言えば時機における祖国と、民族運動がはるか過去のものとなった時機の祖国とは、別のものです。祖国と祖国擁護とについての命題を、あらゆるばあいに一律に適用することはできない。

プロレタリアートは民主主義運動では、祖国を擁護することを支持しなければならない。そのことが非抑圧階級の利益を代表する労働者階級の利益にかなうことである。